
僕に悪魔が舞い降りた

CROWN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕に悪魔が舞い降りた

【Nコード】

N7098P

【作者名】

CROWN

【あらすじ】

今年4月晴れて高校生になった平凡な少年 成瀬岬。

ある日寝坊をしてしまって、通学路を急いでいたところ目の前に黒く、長い車が（世間ではそれをリムジンと呼ぶ）止まった。

降りてきたのは、超金持ち、成績優秀、おまけに男前のクラスメイトの神原和麻。

リムジンで学校に送る代わりに、夜の小学校に一緒に不法侵入してほしいと頼まれた岬だが……。

MON:OPENING(前書き)

はやみねかおる先生の「都会のトム&ソーヤ」を参考にして作りました。

似てる部分がほとんどですが^^;

この後内容が多少変わってきますのでご了承ください。

MON: OPENING

僕は今極度に眠い。今年の4月に晴れて高校生になれてから2ヶ月たった6月、どうして僕は真夜中まで塾に通わなければならないのか。

……理由は一つ。成績が悪いからだ。仕方ないじゃん……一つランクが上の高校に入学したんだから。受験生の時はそりゃあ必死で勉強したけど……いざ入学したらやる気なんてどこかに吹っ飛んだ。

というわけで、僕は瞼の上にセロハンテープを貼って無理矢理目を開けているのだ。この状態で自転車漕ぐの結構きついんだぜ。

僕の名前は成瀬岬^{なるせみさき}。どこにでもいる普通の高校1年生。ただみんなと違うのは、塾に行っても勉強がまったく理解出来ないところ。おかげで全教科平均的ぴつたし。

僕が通う学校は、ここらへんではそこそこのいい学校。まあ、ピンキリだけどね。つまり、頭がいい人もいるけど、悪い人もわんさかいるってこと。もちろん僕は……勉強が理解できないくらいだからね……。

自転車で住宅街を駆け抜ける。この先に僕が通ってた小学校がある。つて、その先の住宅街に僕の家がある。

男の僕でも、さすがに夜の小学校は少し怖い。窓から見える小学生の習字が異様な雰囲気がして、目を背けたくなる。

「早くかーえろっ……」

別に誰かが返事してくれるってわけじゃないけど、とりあえず声に出してみて、早く帰ることを僕は決意した。

しかし、今の時点で僕は大変な事件に巻き込まれてしまうことに気付くはずもなかった。

僕の理想の朝というのは、まず母さんが「朝ですよ」と起こしてくれて、階段を降りる途中で焼きたてのトーストの匂いがする。そんでもって、リビングに行くテーブルの上にはコーヒ―（もちろんガムシロ入り）と焼きたてのトーストが置いてある……はずなのに。

「もうこんな時間っ！？ 何やってんだよ、目覚まし！！」

時計の針は8時15分を指している。授業は8時40分開始だ。そして、テーブルの上には母さんからのメッセージ。

今日は早く仕事に行きます

メッセージ残さんでもわかつとるわ！、と叫びたくなるがタイムロスは避けたいので、素早く僕は綺麗にたたんであった赤いパーカーとジーンズを履く。

そして、トーストを焼いている間に洗面所に行って、グシャグシヤになっている髪の毛を適当に整えた。

「さあ、勝負だ……！」

僕は思い付いた。モチベーションをあげるために……トーストが焼けた音がしたら、ゲームスタートとする。時間との戦いだ。約20分で学校に着けるのか、ってところがちよつと疑問。家から学校までは歩いて30分かかるけど、全力疾走すれば間に合わなくもないかもしれない。

僕はリュックを背負って、トースターの前に立った。

全力疾走したら間に合うかもって思ったけど、さすがにきついなあ。どうすればいいんだ、僕！

頭の中の自分に問い掛ける。そして回送シーンが頭の中に浮かび上がった。

真っ白な背景の中。突如、腰に手をあてたもう一人の僕が目前にいて、見下すような目で僕を見ている。

なんだよ！ 哀れんだ目で人を見るな！

「高校生なんだから、チャリ使えるだろ」

「あ、その手があったか！」

もう一人の僕はクールに肩をすくめて、ため息をする。そして、

嘲笑気味に微笑みながら手を振った。

白い背景は消え、目の前にはトースターが。

ありがとう！ 僕！

僕の頭の中は困った時に何故かもう一人の僕が出て来るのだ。しかも、冷静沈着で頭の回転がすこぶる早い。くそ、あいつみたいにもっとクールに生まれたかったぜ。

すると、トースターからトーストがガシャンと出てきて、ゲームスタートの合図をした。僕はトーストを口に挟み、玄関へダッシュした。

しかし、僕は自転車には鍵が付き物ということを完全に忘れていた。

「あああああっ!!」

僕はその場に崩れ落ちる。鍵の居場所なんて、普段使っていないだから知るわけがない。

恐る恐る腕時計をちらりと見る。現在、25分。10分のロスだ！

「まずいまずい!!」

とりあえず走りやすいスニーカーを選び、家を飛び出した僕であった。

「はあ、空が今日も眩しい…」

もう完全に僕は諦めムード。だってあと15分しかないし？

無理だし？ ウサイン・ボルトなら行けるかもしれないけど……。

僕は部活でテニスをやってるだけの凡人だからなあ……。人よりは体力あるだろうけど。

そんなことを思いながら、とぼとぼと高校に向かって歩いて、少したったところだった。

鼻歌で歌っている「エースを狙え」のサビの部分に差し掛かったとき、僕の目の前に黒く、でかく、長い（世間ではリムジンと呼ばれる）車が止まった。

「さーぶ、すまっしゅ、ぼれー……」

僕の目の前に止まるってことは、僕に何らかの用事があるってことだよ。

もしかして……、実は僕はなんとか財閥の御曹司でしたパターン？ それとも、社長令嬢が僕に一目惚れをして声をかけてきたパターンですか！？

「君は実にわかりやすいね。……残念ながら、君は御曹司でも社長令嬢に好かれてもいない。変な妄想はやめたまえ」

リムジンの少し開いた窓の中から冷酷で陰湿つばそうな感じの声をやる。まるで、もう一人の僕みたいな……。

するとリムジンの扉が開いた。降りてきたのは、黒縁眼鏡をかけていて、見覚えがある奴。

「あ、おまえは……和麻^{かずま}！？ なんでお前がこんなところにいるんだよ！？」

「that's rightだよ。君に覚えてもらえてると思わなかったけどね」

今から長い説明をしよう。こいつがリムジンで降りてきた理由も、どうして僕が驚いているのかも、ボキャブラリーが少ない僕は短くまとめられないからね。

かんばらかずま

神原和麻。祖父が神原グループの会長で、父を警視總監に神原グループの御曹司、おまけに母は僕たちが通う高校の理事長。成績優秀で、いつも静かな屋上で難しそうな本を読んでいる（たまい僕が読めそうな本も読んでいるけど）。

決して性格が悪いわけではないと思うのだが、人を寄せ付けない異様な雰囲気を持ち、クラスでも孤高の存在。僕の前の席で、2ヶ月たった今でもクラスメイトと関わろうとしない変わり者だ。

よし、ちゃんと説明できたぞっ！

すると、神原和麻が人差し指を偉そうに立てて僕に言った。

「君どつかで見たことあるんだけど、誰だっけ？」

おいっ！ 同じクラスなのに忘れられてる僕って……。そんなに存在感がないのかな……。

無償に泣きたくなる。

「成瀬岬。同じクラスで和麻の後ろの席に座ってる！」

「なるほど、君が成瀬岬か。見えなかったから覚えていないわけだ。見えていても覚えていたと言いつれいけないけどね」

納得したように神原和麻は腕を組んだ。

こいつは自分が悪いとは思わないのか。和麻の説明にある「決して性格が悪いわけではない」は残念ながら取り消してもらおう。

「ときに、成瀬くん。君は今日寝坊して、焦っている。そうだろう？ 僕のリムジンと一緒に学校に行ってやってもいいんだけどね」

マジで？ リムジンに！？

寝坊していた僕にとって和麻は天からの授けものだ、と言いたいところだ。

なんかムカつく！ もっと普通に喋れないのか。
でも、和麻の話はそれだけでは終わらなかった。

「しかし、連れていくには条件がある。僕の頼みを一つ聞いて欲しいんだ」

金持ちの頼み？ 御曹司だからどつかのスパイに命を狙われている。だから、代わりに人質になってほしいとか？ 僕が人質になっても、庶民丸出しで即ばれると思うんだけど。

僕の脳内に天秤が浮かび上がる。左には、遅刻してみんなの前で怒られる僕の映像。右にはスパイから逃げている僕の映像がある。

どっちもいやだ……！

「僕と一緒に夜の小学校に行ってほしいんだ」

神原和麻は、僕の耳元でボソツとつぶやくように言う。
ゾクとしたのは、耳元で囁かれたからか、その内容に驚いたからなのか。

「えーっと……」

「なに？ ま、理由はともかくよろしくね」

「うん。よろしくね……ってちがーう！！ 違くないけど、なんで僕が夜の小学校なんかに行かなきゃならないんだよ！ お前はロリコンか？ かわいい小学生の紙粘土でも盗むのか！？」

こいつは……まさかのロリータコンプレックス略してロリコンか！？

マジで本気で小学校に侵入するっていうのか？

僕が推測するに、和麻はロリコンで小学生の美樹ちゃん（仮名）がお気に入り。でも、高校生が美樹ちゃんに話しかけることなんて出来ないから、せめて紙粘土を盗もうつて魂胆だな！

「言うておくが、僕はロリコンじゃない。それに僕は子供は苦手なんだ。本当は
小学校なんか行きたくないんだから……」

黒縁の眼鏡をあげる仕草をしながらぶつぶつ言う和麻は明らか嫌そうな顔をした。

じゃあ、どうして？　そもそもなんで僕を選んだ？

僕の中には疑問だらけだ。

「ま、立ち話もなんだし学校で詳しい話をしようじゃないか」

「ところで和麻君、今何時？」

「……fourty-oneだね」

ふぉーていわん。ふぉーていーって40だったよな……？

「おいおい！！　過ぎてるじゃん！！　リムジンで送るって言ったのは誰だよ！！」

慌ててリムジンに乗り込む僕と和麻。

「落ち着きたまえ。先生は人間。落ちついて話せばきつとわかって

くれるはずだ。岬くんがスパイに追われているところに、僕が助けに入ったから、遅れたって設定でいいね？」

「庶民はスパイに追われないっ！！」

まったくんでもない奴だ。この神原和麻という男は。

でもまんざらでもない僕がどこにいる。理由はともかく、面白そうじゃないか。夜の小学校なんてに不法侵入なんて。

MON:OPENING(後書き)

閲覧ありがとうございます。

感想などありましたら、ぜひよろしく願いします^^

舞い降りた悪魔

クラス内、もはや先生までもが僕と和麻の同時遅刻登校に騒然としていた。

当然だ。今までクールで、人と一緒にいるのを嫌っていた和麻が、一般庶民の僕と一緒に登校して来たんだから。

僕だって驚きだよ……。これから和麻の紙粘土を盗むために不法侵入するなんてさ。

「先生、岬くんがスパイに追われていたので僕が助けていたら、遅れてしまったんです。許していただけますか？」

和麻の営業につこり爽やかスマイル。この笑顔を正面から受けてしまった者は和麻の虜になってしまう（男女問わず。先生は女だけど）、と心の中で和麻の説明に付け足す。

案の定、先生はとろーんと潤った目で「早く席にお着きなさい」とだけ言った。

第一、和麻の母はこの学校の理事長だ。先生ごときが和麻に逆らえるはずもない。

いや、でも僕がスパイに追われるってどう考えてもおかしいだろ！ 和麻が言うのと真実っぽく聞こえるけど。クラスのみんなや先生は全く疑っていない。

恐ろしい！ 神原和麻！

前後の席に座り1時限目の英語を受ける。

あーあー、もうちんぷんかんぷんだよね。英語って。日本にいれば英語なんか使わなくても済むんだから……と思いつつ僕は先生が黒板にぎつしり詰めた英文をノートに書いた。それにしても前の席の和麻の頭が邪魔で見えない！

でも和麻は一回も体勢が低くなってない……ってことはノートをとっていない！？ しかも、よくみたら寝てるし……。

「おい、何寝てんだ馬鹿！ いい点とれなくなるぞ」

嫌がらせ半分警告半分に和麻の椅子を軽く蹴る。

すると和麻が起きたらしく、ジットリした目で僕を見てきた。さつきまでの営業スマイルを僕にも向けるよ！

「こんなe a s yな英語は勉強しなくてもわかるのが普通じゃないのかい？」

「e a s yって……くそっ」

「それより僕は小学校のことをシュミレーションしてるんだから、邪魔しないでくれたまえ」

シュミレーションって今まで寝てただろ！

僕は小学校より、今の仮定法の方がよっぽど大事だよ……。
くそわかんない。

「I f s h e w e r e a……」

先生の英語が子守唄みたいに僕の頭にこだまする。
うとうとしてきた……。

「人には授業を受けろって言うついて、自分は寝るってどういっ」とかな、岬くん？」

「えーっと……睡魔が……」

和麻が僕の背中を叩きながら偉そうに言う。痛いって！

あれから結局僕は眠りについた。窓から吹いてくる初夏の風が異様に心地よくて、ますます眠気を誘ったのだ。寝ても仕方ないよ、うん。

和麻はため息をしてから自分の席に戻り、鞆から本を読み出して読もうとしている。

呑気な奴。紙粘土を盗みに行くっていうのに！

「わかってないようだから言っけど、僕は紙粘土には興味ないからね……？」

ジITTERした目で僕を見ながら、和麻は黒縁眼鏡を人差し指で動かす。

「紙粘土には？　じゃあ習字がお目当てか？　ところで、何の本読んでるんだ？」

「殺人犯の真理」

こいつと本当にやっていけるか心配になった僕だった。

授業が終わって放課後だというのにまだ明るくて、夏って感じがする。絶好の部活日和だ。ビバ、スポーツ！　ビバ、テニス！　僕たちの高校の近くにはテニスコートがなくて、少し自転車で行ったところにある。坂道がきつめでトレーニングにもってこいだ。

漲るパワー、煌めく汗！（ちよつと汚いけど）これこそ青春！
と、いうわけでみんなが帰っていく中、僕も部活へ行こうとリュックを背負ったところだったのに……。

「待ちたまえ。僕との約束を忘れたのか？　打ち合わせもしないで戦いに望むとは無鉄砲にもほどがあると思うけどね、ワトソン君」

和麻が「死んでも行かせない」とも言いたげな雰囲気を漂わせて、僕の行き手を塞ぐ。

「誰がワトソンだ。忘れてないけどさ、僕はどうしても、なんのために不法侵入するかわからないんだよね。それに、約束って結局遅刻しただろ！」

僕は紙粘土を盗む意外に不法侵入する理由を思い付かない。

「昨日の新聞見てないのか？」

自分に不利益なことはあつさりスルー。これが神原和麻なのか……。

新聞って言われても、僕は活字を教科書と漫画の吹き出しでしか見ないからなあ……。おまけにニュースも見ないし。

すると、和麻は綺麗に切り取つてある新聞の切れ端を鞆から取り出して、僕に見せた。

もちろん、「世間を知れ」とでも言いたげな、皮肉たっぷりの眼差し付きで。

新聞の記事は、「小学校6年生の少女、行方不明」という見出し。

「僕はその女の子の親に搜索を依頼されてるんだ」

「おまえが……？」

和麻が言うには、行方不明の女の子のお母さんは、女の子が来年私立中学受験を控えてるから、警察に捜索願いを出せないらしい。

「名前が公表されるのが嫌らしい」

変な話だ。どうして自分の娘が行方不明になっているのに、そんなこと考えられるんだよ、と関係ないけど少しムキになってみる。

「おまえの父さん、警視総監だろ？　　どうして父さんの方に頼まないんだ？」

「父は関係ない！」

和麻は急に立ち上がり、激しい口調に変わる。

「家のことは僕に関係ない」

今度は落ち着いたように、だけど自分自身に言い聞かせるように静かに言った。どうしてそんなに親を毛嫌いするか僕にはわからないけど……。御曹司にしかわからないこともあるのだろうか。

「警察の仕事ってのはよくわからない。だけど、父は記事になると思った事件しか受け付けないんだ。それに、警察に捜索願いを出さないと捜索は出来ないって。当たり前だけどね。父も暇じゃないだろうし」

「だけど、どうやっておまえが引き受けたんだ？」

そう聞かれると、和麻は急に僕の手を引いてパソコン室に連れて行った。そしてパソコンを開き、インターネットを立ち上げると「KK探偵事務所」というサイトを検索する。ここに書き込んだである最新のレスに昨日の事件のことが書かれていた。

「KK探偵事務所……？」

「神原和麻の略。このサイトは身近に起きた解決してほしい事件を掲載してもらうんだ」

書き込みは100件を越えていて、その中のほとんどが「猫を探してほしい」とか、「相談にのってほしい」とかだった。

「今まで全部解決してきたのか？」

「うん。そうだけど」

こいつが人の相談なんか受けたら、きっとみんな落ち込むと思うんだけど……。でも100件も解決するなんてすごいよ。100人の悩みをなくしてあげたってことだろ？ 僕なら絶対できない。

「打ち合わせをするために会った人たちは皆、僕が高校生だって聞いて不安そうにしてたけどね」

和麻はパソコンのディスプレイから視線を外さない。

しかし、次の瞬間。

「解決したときに、みんなに『ありがとう』って言って貰えるのが嬉しいんだ」

そう言つと和麻はかすかに微笑んだ。

すぐにまた元の無表情に戻ったけど、クラスメイトと関係を持つとうとしないこいつが笑う姿を初めて僕は見た。

だから、僕も思わず笑ってしまった。

「アハハっ、和麻が笑った！」

和麻は無表情からちよつと不機嫌そうな顔に変わり、「ふん」と鼻を鳴らした。

まだ和麻のこと全然わからないけど、意外と良いところもあるんだな。

「それで僕たちは、行方不明になった女の子の母親に会わないといけない」

和麻は不機嫌な顔からまたいつもの無表情に戻して、話題を戻す。僕が想像するに、美樹ちゃん（仮名）は大富豪の娘。どこかのスパイに狙われていて（誰かさんと同じだ……）、放課後の学校背後から近づいてくる男の影に気付かない。ハンカチに染み込んだクロロホルムは美樹ちゃんをぐっすり眠らせた。そして、校門から出ていく白い車に美樹ちゃんが乗せられていたとは誰も気付かなかった。

僕すごい！ 推理小説書く才能あるかもしれない！

「君のその妄想力だけは褒めてあげたいね」

和麻が恭しく拍手をして下さる。褒められてる気がしないのは気のせいなのか、いやきつと気のせいじゃない。（実際褒めてないんだろうけど）

「安心したまえ。君の思考ほどわかりやすいものはないだけなんだ。気にすることないよ」

どうしておまえはそう皮肉しか言えないのかな！？、と言いたくなるが、大人な僕は拳を握りしめて我慢、我慢。

プライドがないわけじゃないけど、和麻のプライドと比べたら月とスッポンだよ。（使い方合ってるっけ？） その高い高いプライドは今だかつて壊れたことは、和麻が言うにはないらしい。

「岬くんのせいで話がズレるから、ちょっと黙ってて。それで、行方不明の女の

子のお母さんは染谷町に住んでるみたいだね。岬くん住んでるの染谷町の近くだよね？」

別に僕言葉を発してないけど！？

「染谷町か、良いところ住んでるんだね。高級住宅街だよ！ でもさ、女の子が誘拐されたって心配はないの？」

『行方不明』誘拐』という方程式が頭の中にある僕にとって、行方不明はとても危険な状態だと思う。だけど、和麻は微笑んで親指を立てた。

「心配ない。それに、誘拐の可能性があるなら警察に通報してると思うよ」

まだ僕にはよくわからない。でも和麻が大丈夫って言うなら、きっと大丈夫なんだろうな。

「大体わかった？　じゃあ、早速行こうか」

「おう！」

なんかワクワクしてきた。本当の探偵になったみたいだ。

僕はズボンのポケットからケータイを取り出し、テニス部の部長にメールを送信した。

「調査をしに行くので、今日は部活を休みます」

ってね！

和麻の秘密（前書き）

「僕に悪魔が舞い降りた」も3話目に突入しました。
奇跡だと思えますw

まったり書いていくのでお願いします^^

和麻の秘密

後ろから大勢の女の子が着いてくる。こんなことって初めて！

……まあ、追い掛けられてる対象は冷酷で暗くて陰湿で、クラスメイトと関わ

ろうとしない孤高のこいつなんだけど。

「岬くん、後ろから着いてくるあの大群はなんだろうね」

おまけにこいつはこういうことには鈍感で困る。うらやましくて仕方がないのに

！　まず、どうして僕たちが（女の子たちは和麻だけしか見てないけどね）女の子に着いて来られているかを説明しよう。

パソコン室から教室へ向かう途中、女の子がわんさか僕たちに（和麻が目当てだけどね……）群がってきたのだ。

僕も今まで意識したことなかったけど、和麻は結構のイケメンだと思う。（あのきつい目つきを除けばね……）とにかく、眉目秀麗だ。女の子いわく、あの近づきがたい雰囲気を持つてるクールでイケメンな和麻に自分だけが愛されたいそうだ。（こっそりさつき聞いたんだ！）

そのわりに和麻は女の子に全く興味を示さない。まさか、過去にトラウマがあったとか？

僕の方かというと、女の子が僕に全く反応を示さないところからわかってほしい。頭の中で、凡人は顔も凡人なのさ、と言ってる和麻を蹴りだす。

すると、一人の女の子が和麻の前に立ちはだかって、パンフレットみたいなものを渡した。

「私は神原和麻ファンクラブの会長の東雲梓！ 神原くんと同じクラスなのよ！ ちなみに斜め後ろの席！」

僕がいるのに僕の席の隣とは言わないんだね……。その方が説明しやすいよ？

（悲しくなってきた！ 堪えろ、自分！）

「よろしく、東雲さん。じゃあ、急用があるから……」

なんで僕のとときみたいに「見えなかったから覚えていないわけだ。見えていても覚えていたとは言い切れないけどね」って言わないんだよ！ どうせ東雲さんのことも覚えてないんだろ！

和麻が笑顔で喋ると、後ろの女の子から黄色い声援があがる。でも僕は和麻の笑顔がだいふ引き攣ってるのを見てしまった。

助けて、岬くん！

和麻が目でそう訴えてくる。よし、任せろ！ 和麻と今日初めて話したけど、和麻から助けを求められたのは初めてだ。

「あつ、ゆーふぉーだ！」

発音が悪い僕の英語はひらがなで表示されてしまうのか！

女の子たちはみんな僕が指差した方を見る。その間に和麻を掴んで、走り出した。

「きゃあ！ 和麻くーん！ お待ちになってえ！」

ああ、怖い！

女の子って、もっと優しくてかわいらしくて素直で控えめなんじゃないの！？

僕たちは放課後の廊下を疾走する。その後が続く女の子たち。傍から見たらうらやましいと思うかもしれない。

だけど……、

恐すぎる……！

和麻の表情からもそう読み取れる。それにもう完全に和麻はアウエーだ。放心状態だ。

「そうだ！ 男子トイレ！」

男子トイレに逃げ込めば、さすがの女の子も入るはずがない！しかし、僕たちはまだ高校に入学して2ヶ月。パソコン室から教室に帰る道ぐらいはわかっていたものの、適当に逃げて来たから現在地不明だ。

トイレなんぞ論外だ！

「岬くん、あそこ！ その角曲がればトイレがあるよ！」

アウエー状態のだった和麻がようやく復帰。和麻が校内の位置を全て覚えてるって言っても、僕はもう驚かないぜ。

そして僕は遠心力に負けないように角を曲がり、トイレに駆け込んだ。二人して慌てて奥の個室に入る。

「和麻くんトイレ入っちゃった。ねえ、大か小どっちだと思う？」

「ちよつとやだーっ！ 神原くんが大とかないでしょ！」

ひえええ！！ やめて！！

僕の女の子に対するイメージがボロボロになるからやめてえ！！
最近の女の子って下品なのか……。あ、和麻が関わるとみんな豹
変しちゃうんだな。きつとそうだよな。うん……。

肝心の和麻はまたまたアウェー状態。しばらく便器の上に置いて
おこう。

その間に僕は、このトイレから逃げる道程を考えなければいけな
い。

まず、教室に戻って荷物をとりに行かなきゃいけないけど、きつ
と僕だったら女の子の中歩いて気持ちいかなきゃね……。

しかし、僕は教室の場所がわからない。だけど最近の携帯には、
GPSという便利な機能がついている！ 最近の携帯は居場所を知
りたい相手にメールを送るだけで、GPSが働いて居場所を知ること
が出来るらしい。

僕は早速アウェー（和麻）のポケットからケータイを取り出し
て僕のメアドを入力する。

僕たちが駆け込んだトイレは教室のちょうど真下で、階段も近く
にあったから、教室にとっても近いことがわかった。

「教室から二人の荷物取ってくるからここで待ってるよ」

「……ふぬん」

あーあ、壊れてる……。

役立たずなアウェーはほつといて、個室をこっそり抜けて、女の
子がいなかめる。

しかし、幸いなことに女の子は誰一人いなかった。

「和麻がいなかったら誰もいないっていうのは、さすがに寂しすぎるでしょ……」

なんとなく嫌な予感が僕の脳裏を過ぎる。

現在、5:16 p.m。そういえば、今日の下校時刻は……先生たちが会議するから、早まって5時になったって言ってたなあ……。だから女の子達いなかったんだね。

和麻に付き合うと何故かろくなことがないのはなんでだろう。気のせいかな？（今朝の件もそうだし！）絶対気のせいじゃないはず！ あいつは疫病神だ！

なんてことを思っても、頷いてくれる人は誰一人いない。

妙に静かな学校の廊下をを一人で歩くのは、少し勇気がある。自分の足音しか聞こえないけど、誰かの足音も聞こえそう。

「誰か……っていないよね」

気付いたら窓の外は、もう太陽が沈んでいて教室は真っ暗。かうじて外の街灯で中がうつすら見えるくらい。

僕は和麻と自分の荷物を背負い、教室を出ようとしたその時。カッン、カッンと明らかに生徒用の上履きじゃない音が教室に近づいてくる。

不法侵入者……？

先生の上履きはサンダルだ。こんなブーツみたいな音はしないはず。

じゃあ誰？ 和麻が起きた？ でもきつと和麻はまだトイレでアウェーだろうし……。

僕はそう考えながら、先生の机の下に隠れる。（先生用の机って、

生徒用の机と違って隠れられるよね！)

そして、教室の前で足音は止まった。

胸の鼓動が早くなる。僕の手と背中中は、冷や汗でびっしょりと濡れて始めている。

今の心情を一言で表すと、怖い。二言で表すとめっちゃくちゃ怖い。すると、不法侵入者と思われる人の話し声が聞こえた。

「……さまは、いないみたいだな」

「おかしいわ……。GPSはこの位置を示してるはずなのに」

誰かを探してる？ まさか、僕を！？

しかも、不法侵入者は一人じゃないみたいだ。僕も小学生に不法侵入したら、こんな冷静でいられるのかな……。

「勘違いしないでくれたまえ」

いきなり、脳裏に出てきた和麻は、呆れたような目で僕を見下す。

もう話しかけないでくれたまえ！

和麻の口調を真似すると、曇天の様な陰湿を漂わせた目で僕を睨んで、消えた。

僕は不法侵入者が教室をうろついている間に教卓からこっそり抜け出し、忍び足で教室を歩く。気分は絶体絶命の忍者だ。

差し足、抜き足、忍び足と……。

「ん……？ 教室に誰がいるぞっ！」

ぎゃああ！！音立ててないのに、なんで！？強者は気配を感じ取れる能力を持つてるのか！？

気付かれてしまったものは、仕方ない。和麻のところまで走るのみ！

手で口を押さえて、発狂したくなるのを堪えるのはなかなか辛い。

「逃げたぞ！ 追え！」

足音なんて気にしない！

でも心臓は破裂寸前。つていうか、破裂している。例えるなら、鬼ごっこで鬼に見つかった瞬間。息止まるよね。

もう暗い廊下を全速力で疾走して、階段を手すりをすべりだいの様に滑る。

そして、和麻を置いていったトイレに駆け込む。

「アウエ……じゃなくて和麻！」

もしや和麻にまでも異変が！？と思ったけど、和麻は置いておいた場所にアウエー状態は解除されてちゃんと座っていた。

「人の携帯を持ち出したうえに、書き置きも残さないとはどういうことだ！ まさか女の子達に連れて行かれたとは思わなかったけどさ！」

思わないんかい！

でも黒縁の奥に光る和麻の目は本気^{マジ}の目だ。

かなり怒っている。

相変わらず雰囲気は曇天のようだけど、今は稲妻がプラスされたような感じ。わかってくれる？

「心配したんだからね！」

「荷物取りに行くって言ったんだけどなあ……」

「聞いてない！」

「おまえが勝手にアウェーしたんだろ！？」

二人して「ふん」とお互い背を向けあう。

しかし問題はまだあるんだ！

和麻がどうしてアウェーした……じゃなくって、不法侵入者の件
！！

和麻に不法侵入者のことを話すと、大丈夫とでもいうようにウイ
ンクした。

「Don't worryだよ。ちょっと僕のケータイを返してく
れ」

和麻の英語の発音は素晴らしい。英語の先生以上だ。

ちなみに僕が発音すると、おわかりだろうが「どんと、うおーり
ー」とひらがな表示される仕組みになってるよ！（英語の先生は力
タカナ。和麻の発音がどれだけいいかわかった？）

「あー、蓮さん？ 僕だよ。今から言う場所に来てくれる？」

和麻は僕からケータイを取り上げると、手慣れた手つきで「蓮」
という人に電話をしている。

蓮ってカッコイイ名前。僕も岬じゃなくて蓮がよかったな……な
んて思ってたよ……。

岬だって一歩間違えれば女の子みたいで可愛いもん……。

「誰に電話したの？」

気になった僕は和麻に聞く。

和麻はしばらく黙って、少し嫌そうに答えを出した。

「ボディーガードかな……」

と、吐き捨てるような一言。

ボディーガードといえば、SPだっけ？ スーパーパシリの略？

（僕は和麻のSPです。と、使おう！）

「言つとくけど、Security Policeの略だからね」

「知ってるけど？ 僕を侮れたら困るな、和麻くん！」

「嘘だね」

「……………」

そうだよ。嘘だよ！

でもそんなにハッキリ言わんとしても……。

それにしても、和麻の一言でスキツときた人は何人いるのだろうか。回数とすれば、僕は確実に20和麻を越えていると思うよ！

「和麻さまの声がする……」

「和麻さま！ どこにいらっしゃるんですか！」

突如、教室にいた不法侵入者の声が個室の外でする。

女性１人と男性１人。この人たちは和麻のボディーガードだったのか！

だから和麻のケータイを持ってた僕を追ってきたんだ！

一人で納得している僕を見下したような目で見ながら、和麻は個室のトイレを開ける。

「蓮さん、蘭さん！　こっち、こっち！」

現れた男女は美男美女。

「蘭さん」と呼ばれる女性の方は、くせつ毛の長い金髪を背中に垂らしてあって、とても美人だ。今まではスーツを来てるけど、頭にティアラを冠せて、ピンクのドレスを着させたら、絶対ピーチ姫に似てる！

一方「蓮さん」と呼ばれる男性の方は、真面目そうな顔つきで、少し怖そう。肩幅広いし、大人の男性って感じがする。

「岬くん、紹介するね。五十嵐蓮さんと蘭さんだよ」

蓮さんと蘭さんに軽く頭を下げる。しかし、二人は珍しいものを見るかのように僕をじろじろと眺めてる。特に蘭さんが。

「まさか……和麻さまのお友達なの！？」

「いや、えーっとなんというか……今日初めて話したっていうか」

「友達だよ、岬くん？」

和麻が天使のように、につこり微笑みかけてくる。でも、目は笑

ってない。

こわっ……。

「と、友達です！」

「和麻さまがご友人と一緒におられるのは初めてだ……」

蓮さんは表情は変えずに、ボソツと呟く。

「それにしても和麻さま、探しましたよ！ 先生方は説明してもわかってくれないので、神原グループ特殊部隊のヘリを呼んで屋上から入ったんです。ドア破壊しちゃいましたけど」

蘭さんは、えへって微笑んで舌を出す。

とつてもとつても可愛いんだけど、ただならぬ力を感じるのは気のせいだと思いたい。

それにしても、蘭さんと蓮さんって同じ苗字だけど、夫婦なのかな？ 夫婦だとしたら、和麻は少し気まずいんじゃないか？

それを和麻に聞くと、「蓮さん達は兄弟だよ」と答えた。

「私は双子の妹。蓮は兄よ。二卵双生子だから似てないの」

ニランソウセイジですか。似てないってことは見てわかったよ。

僕が理解してないっていうことを悟ったかのように、和麻は丁寧^{ご丁寧}に二卵双生子についてのどーでもいい知識を披露してくれる。もつとも左から右に流れているけどね。

よく和麻は雑学というか豆知識を教えてくれるけど、（頼んだことは一度もないけどね！）はつきり言って、雑学じゃなくて英語の文法を覚えたい。

「君、今僕に失礼なこと考えてないかい？」

「いやいや、滅相もない！」

勘が鋭い和麻は僕を睨みつける。

あー、怖い！

「じゃ、和麻さま帰りますよ。社長がお待ちになっています」

蘭さんは片手で和麻を軽々しく持ち上げて、担いだ。

逃げようとジタバタする和麻の背中をバンツと力強く叩くのを僕は見てしまった。

思った通り蘭さんは恐ろしい……。

「降ろせ！ 僕は用事がある！ 今日には先に帰ってって言ったはずだ！」

「はいはい。帰りましょうね。蓮、和麻さまお願い」

蓮さんは無言で和麻を受け取り、トイレの窓から地上へと飛び降りてしまった。（ここ4階なんだけどね……）

「岬くん、ちょっとだけ話があるの。いいかしら？」

確実に顔が引き攣った気がした。

僕は蘭さんに高校の自動販売機の前に連れて行かれた。掴まれた腕がちよっと痛くて、怖いのと早く帰りたいのが入り交

じる。塾あるし。

そして空にはいつのまにか綺麗な満月がぼっかり浮かんでいた。

「コーヒーでいいかしら？」

「……コーヒー牛乳で」

蘭さんからコーヒー牛乳を受け取りながら、僕が呼ばれた理由を考えてみる。

僕が想像するに、和麻の性格の悪さについての議論だと思う。「愚痴りたかったのよお」的な。

まあ和麻のことについては間違いないだろうけど。

「……和麻さまはクラスで上手くやってるかしら？」

蘭さんが初めて見せた不安げな表情。本気で和麻のことを心配しているんだってことが見て取れる。

「関わりを持つとうとしてないツスね。そもそも性格が――」なんて言えない！ 言えるはずがない！

「和麻さまは御曹司だから、誘拐とか人質に狙われることは日常茶飯事なの。だから和麻さまは、自分のせいで他人を事件に巻き込まないために人を遠ざけてる。まあ、もとの冷めた性格のせいもあると思うけど。でも私たちは和麻さまに楽しい高校生活を送ってほしいのよ。友人と楽しくお喋りしたり、文化祭の準備に励んだり」

和麻はクラス内で嫌われてるってわけじゃない。和麻自身も別にクラスメイトは嫌いじゃないと思う。でもいい意味でも悪い意味でもなく浮いた存在だ。

みんなでワイワイするためにある休み時間も、和麻はいつも図書

館が屋上で本を読んでいる。

蘭さんの話からすると、意識的に周囲と壁を作ってるのだろう。僕は口の悪さを指摘したかったが、蘭さんが感傷に浸ってるのでやめた。

「だから今日の朝、和麻さまにあなたの家に向かうように言われた時は驚いたわ」

蘭さんは着ているスーツの懷からハンカチを取り出し、顔を覆う。

「和麻さまは強い人よ。今までもずっと一人で色んなことに耐えてきたの。常に冷静沈着でいるように仕付けられてる。自分だけを信じて、邪魔な感情は捨てろってね」

口が悪いのはそのせいじゃないですよね？と、質問したかったけど、場に合わなかったからやめた。

「私からのお願いです。和麻さまは強い人だからこそ守ってほしいの」

僕は無言で頷いた。反射神経かなのか、わからないけど……。多分、和麻がいい奴だってことを知ってるからだろうな。

「和麻は僕が守ります」

誘拐犯だかスパイだか知らないけど、和麻は僕のことを友だちだと言って言っただ。だから、僕も友だちを守る義務がある。

「ありがとう。和麻さまが1番最初に紹介した人があなたでよかったわ」

蘭さんはその他にも、和麻と和麻の父さんが仲が悪いことも教えてくれた。神原グループの社長の祖父と、警視總監の父。どちらの道を進むか選択しなきゃいけなかった和麻は祖父の道を選んだため仲が悪いらしい。

「和麻さまの道はもともと神原グループの次期総帥になるって決められてただけだね」

蘭さんは悲しそうにそう付け足した。夢が持てる僕たちがうらやましいのだ、と。

だから和麻は父さんに頼るのを嫌がったのか。

「和麻さまのお目付け役が偉そうなこと言ってごめんなさい。さあ、帰りましょ。家まで送ってくわ」

和麻と蓮さんは先に帰ったみたいで、僕は蘭さんの車リムジンで家まで送ってもらった。

結局塾は時間に合わなくて行けなかったけど、お怒りの母さんに和麻といたことを伝えると――。

「和麻くんって、御曹司で成績優秀で眉目秀麗の和麻くん!？」

と血相を変えて喜んだ。

2ヶ月しかたってないのに、なんでそこまで知ってたんだよ！
美形って得！

和麻の秘密（後書き）

読んでくださってありがとうございます^^

感想とかアドバイスがあればあればぜひお願いします。
児童文学の本を書くのが夢なので参考にしたいと思います！

TUE：家宅搜索（前書き）

高校生の男の子の心理がまったくわからない今日このごろ。
はい、どーでもいい！

4話目どーぞ！

次の話は、夜が明け次の日になっています。

TUE：家宅搜索

授業終了の鐘が学校に鳴り響く。

開始の鐘は嫌な音だけど、終了の鐘はいい響きに聞こえるのは気持ちの問題だろう。

3時限目は芸術だった。この学校は書道、美術、音楽の中から一つ選択する仕組みになっている。ちなみに僕は書道。退屈すぎて後悔してる。

「おい、岬！ 早くメシ食おうぜ」

仲の良い宗一と俊輔と祐樹が机を寄せ合いながら、僕を呼んでいる。

「ごめん。ちょっと食べてて」

なんとなくみんなと食べる気分じゃないんだよな。

だいたい、僕はあまりみんなの話についていけない。バンドやらギターやら。僕はまだクラシックの方が雄大さがあって好きだ。話合わせるのって、結構大変なんだぜ。

弁当を右手に教室をでる。自然と足が屋上へと向かっていた。

屋上に続くドアは蘭さんに破壊されたからなかったけど、屋上に出ると和麻はやっぱり一人で壁にもたれ掛かって、本を読んでいた。

「やあ」

「岬くんか。なんか用かい？」

声をかけると相変わらず冷たい返答。振り向きもせずに和麻は答えた。

「あのさ、ご飯一緒に食べない？」

「宗一くんたちは？」

「断ってきた」

少し驚いた表情を見せるけど、すぐ無表情に戻るのがいつもの和麻。

いいよ、とも言われてないけど、和麻の前に座る。

「蘭さんから聞いた。僕を守ってくれるそうだね」

初めて本から目を離し、僕を見てニヤニヤする。
クラスのみんなにこの顔を見せてやりたいよ……。

「頼りにしてるよ、相棒」

和麻はまた視線を本に戻し、無表情で言った。

「素直じゃないなあ」

「ふん」

僕にはわかる。和麻は別に怒ってるわけでも不機嫌なわけでもない。照れてるだけなんだ。

素直に感情表現すれば、きっとクラスでも上手くやれるのに。

「今日こそ行方不明の女の子の家に行って事件の手掛かりを掴むからね。でも、女の子のことは心配しなくていいよ。母親が不安になって昨日の午後、警察に捜索願いを出したらしい」

「それがいいよ。やっぱり僕たちだけじゃ力不足すぎる」

なにか反論するかなって思ったけど、和麻は何も言わない。

少なくとも和麻も自分が力不足ということはわかってるようで、良かった。

「警察に依頼するのはいいけど、女の子は誘拐されてない。断言していい」

「なんで？」

「男の勘かな」

オカシイナ。僕は男なのに勘が一切働かない。

「まだ僕の想像にすぎないけど、女の子の母親にはなんらかのメッセージが残ってたんじゃないかと思う」

つまり、家出ってことか。家出でするほど苦しいことが小学生にはあるのかな？

勉強がいや？ 友達と喧嘩した？ 彼氏にフラれた！？

小学6年生の女の子も僕たちにはわからない色々な複雑な事情があるのかもしれないなあ。

和麻はまったく気にしてないようだけどね！

「悩んでも仕方ないさ。腹が減っては戦は出来ぬって言うし、とり

あえずお昼食べようよ」

やっぱりね……。

血も涙もない男だ。

「で？ まだ来ないの？」

「なにが？」

和麻が不思議そうな顔をする。

「決まってるだろ！？ フレンチのフルコースを作るシェフだよ！」

和麻は軽蔑したような目を僕に向けて、ランチボックスを開けた。中に入ってるのは普通のサンドイッチ。

「くそ、キャビア入りか」

「普通のタマゴだけど」

庶民のサンドイッチが味わいたって頼んだのか！？

僕なんかキャビア入りのサンドイッチ食べたくても食べれないんだからな！

キャビアが美味しいのか知らないけど。

「母が普通の生活をさせたがってるらしい。何を考えてるか知らないけど、多分神原グループの頂点に立つなら庶民の生活も知らなきゃいけないってことだと思う」

「金持ちも大変なんだな……」

言葉の裏に「庶民って……くそっ」なんて意味は含まれてないぞ！
それから僕たちは意外に普通のたわいもない話をして、昼ご飯を
終えた。

休み時間も残りあと10分。

焦るのも嫌だし、和麻といると何があるかわからない。早めに帰
るのが無難ってもんだ。

教室に帰ろう、と言うと和麻は無表情で頷いた。

教室に着くと、まわりから何故か視線を感じる。和麻は全く気に
してないようだが、クラス全員が僕たちを見ていた。（女の子の場
合和麻だけかもしれないけど）

「僕、顔になんかついてるのかな？」

小声で和麻に聞くと、無言で首を横に振った。

よくわからないまま席に着く。（少なくとも僕についてじゃない
だろうしね）

「おい、岬。おまえ和麻と飯食べてたのか？」

「うん。そうだけど……何？」

後ろの席の宗一が僕に話し掛けてきた。まるで宇宙人を見るか
のように僕を見ている。

「あの和麻と1分会話が続いた者は今だかつて一人もいない。最高
記録が、祐樹の35秒だ。なのに、おまえは飯と一緒に食っただと
！？ 昨日の同時登校といい、何があっただんだ？」

そうか……。みんなが驚いているのはそういうことか。

みんなそうは言っけど、ちょっと……だいぶ口が悪いだけで、話
しづらくはないけどね。

「まあ色々あって話すようになったんだけど、和麻は口が最高に悪
くて、見下してくるけど、嫌な奴じゃないぜ」

全くフオーロになってないけど、それはこの際置いていて、僕は
今日の女の子のお母さんに話を聞くことを考えなければいけない。
事情聴取かあ……なんか刑事になった気分だ！　楽しんでいいこ
とじゃないけど、ワクワクしてしまう。

だけど、1番考えなければいけないことは、次の授業を居眠りせ
ずにどうやって乗り切るか、ということである。

チャラララ～チャララララ～チャラチャラチャララララ～

僕の頭の中にあの有名な探偵漫画のオープニングが流れている。

そしてカツン、カツンと革靴のような音が暗闇の中から聞こえた。
暗闇から出て来たのは、見た目は子供で頭脳は高校生な探偵の服装
をした和麻。黒縁眼鏡が妙に光っている。

「真実はいつも一つ！」

和麻はウインクしながら僕を指差す。

首元の赤い蝶ネクタイが妙にお坊ちゃんっぽい。
ある意味和麻にピッタリだ。

「僕は社会人探偵（26）の神原和麻！　ある事件を捜査したら
突然後ろから殴られて、目が覚めたら、高校生になっていたんだ」

困ったような顔で肩をすくめている。

なんと言えはいいのか……。

社会人探偵って言わば普通の探偵だね。

僕が呆然と突っ立っていると、場面が変わって目の前の和麻が消えた。

暗闇の中、かわりに現れたのは、気味の悪い笑みを浮かべているピエロ。口元は笑っているけど、目は笑っていない。

しばらく睨みあった末にピエロは口を開いた。

「神原和麻はいずれ死ぬ」

ヘリウムガスを吸ったみたいな声で、ふふふとピエロは可愛く笑う。まるで苦難を楽しみにしているかのよう。

和麻が死ぬ？ まさか。

僕は否定したくても声が出なくて否定出来なかった。

「忠告しよう。神原和麻はいずれ死ぬ。神原和麻は我々には逆らえない。いずれマリオネットと化す。」

和麻が死ぬって言われても困るけど、それよりマリオネットってなんなんだろ。（アントワネット？ 「それは女王の名前！」と自身にツッコむ）

「じゃあね。せいぜい頑張ってね。トラブルメーカーさん」

ピエロは僕に手を降って、暗闇の中に歩き去った。

突然頭に激しい衝撃を感じて僕は目を覚ました。

まるで何回も僕の頭をハリセンで叩かれているような激しい痛みが僕を襲う。

「おーい、起きろ起きろ！」

痛みの正体はコイツだ。コイツが僕の頭を丸めた新聞紙で叩いている。

「痛い痛い！　頭を叩くと脳細胞が減るんだぜ」

「君に脳細胞？　笑わせないでくれたまえ。元からないだろ」

この憎まれ口、和麻だ。

まわりの状況を察すると、僕が居眠りしている間にもう授業は終わったみたい。

みんなは大声を出した僕たちを不思議そうに（気味悪がるって言った方が正解かな……）見ている。

すると和麻はいきなり、得意げな顔で鼻を鳴らし、僕にこう言った。

「言っておくけど、僕は死なないから」

まるで僕の夢を見透かしているかのよう。

でも、どうやら僕は授業中に「和麻、死ぬな！」と叫んだらしい。

（和麻君はご丁寧な僕のマネまでしてくれた）

「僕を誰だと思ってる。僕は神原和麻だよ？」

夢は夢。和麻が死ぬなんてありえない。ただの夢。

僕の脳裏に蘭さんの言葉がよぎる。

誘拐とか人質に狙われることは日常茶飯事なの。

派手に事件に関わったら、和麻は被害に遭う可能性がある。ピエロは事件に関

わるな、と忠告したいのか。

ピエロの微笑みがリアルで、夢だと言いつけるのは難しい。正夢になったら？ 和麻が誘拐されたら？

僕は何が出来る？ 何も出来るはずがない。蓮さんや蘭さん、和麻のおじいさんに迷惑かけてしまう。

「あのさ、マリオネットって何？ アントワネットじゃないよね？」

「マリオネットは英語で操り人形って意味だよ。アントワネットは我が儘な女王」

操り人形か。ピエロも皮肉なことを言うもんだ。

まあ、色々考えてもしかたない。行くところまで着いて行くのが僕の役目。

例え地獄への片道切符しかなくても着いていく羽目になるんだろうな……。

和麻は僕を見透かしたように、得意げに微笑んだ。

TUE：家宅搜索（後書き）

この物語も4話目です。（しみじみ）

ここまで続いたのも、読んでくださった方がいるからです！
ありがとうございます！

家宅捜索 vol.2 (前書き)

5話目に突入です。

すらすら動いていた手も、もうあんまり動かなくなってきました。

「蓮さんと蘭さんをまくにはどうすればいいと思う?」

授業も掃除も全て終わり、空になった教室。

帰る支度をする僕は和麻にそう質問された。ハッキリ言って無理だと思うんだけど……!

「蓮さんはまだしも、蘭さんの目を盗んで調査するのは流石に厳しい。どうすればいいと思う?」

「考えておけよ! そもそも、蓮さん達にも協力してもらえばいいじゃん」

「駄目だ。もし、おじいさまに伝わったら……」

和麻の顔からサーツと血の気が引いた。

そんなに恐ろしいんだったら、やらなきゃいいのに。

「うーん……じゃあ裏道を使えばいいんじゃないかな」

裏道は、学校にある小さな林の裏から敷地外に出られる小道。逆にちよつと遠回りになるけど、蓮さんたちに見つかる心配はない。

「Nice ideaだね! じゃあ、早速行こうか」

「はいはい……」

和麻の目は遊園地へ行く子供みたいにキラキラしてる。

いつのまにか僕の中での和麻の印象が「冷淡で秀才、容姿端麗で、さらに一人付き合いが悪い奴」から「好奇心旺盛で後先を考えないで行動する、人を巻き込む馬鹿」に変わりつつある。

僕はあんまり事件に関わらない方がいいと思うんだけどな……。

林の裏にまわると、外に続く小さな小道があった。

でも、夕方の太陽はもう傾いていて、光は林に入って来ないから、薄暗い。足元の小石が僅かに見える程度。

それでも僕の視力は両方1.5なんだよ！ 動体視力はいいけど、なぜかテニスはあんまり上手くないんだよね、不思議なことに。それに比べて和麻は足元が見えないみたいで、さっきからずっと転んでいる。

「眼鏡をつけていても、夕方は目が悪くなるんだよ」

「聞いたことないけど……」

眼鏡を外すと視力は0.2しかないらしい。手足中痔だらけだ。薄暗い小道は長くて、奥に光がさしている。まるでトンネルのよう。

「ある3人家族がいた。父、母、子は普通に仲が良かった。しかしある時、父が交通事故で亡くなってしまった。母は不甲斐にも葬儀に来た父の同僚に恋をしてしまった。そして数日後、母は子供を殺害した。なんでだと思う？」

いきなり和麻が奇妙なことを話します。
どうした、和麻。ついに頭がいつちゃったのか……。

両手を合わせて和麻を拝むと、最高級のジツトリした目で僕を睨んでくる。

「早く答えたまえ……」

「うーん、お父さんが亡くなって気が狂ったんじゃないか？」

すると和麻は「やっぱりな」とでも言いたそうに、腕を組みながらニヤニヤする。

「これは殺人犯の心理テストなんだ。普通の人は岬くんみたいに答えるんだよ」

「ってことは僕は一般人？ それとも一般の殺人犯？ よくわからないけど……」

でも父親がいなくなって悲しい時期なのに、子供を殺す母親がいるのか？

そのことを和麻に言つと、

「葬儀のときに母親は父親の会社の同僚に惚れちゃったんだよ。そこが問題」

「じゃあ……子供が邪魔になったから？」

和麻は首を横に降る。

何が違うんだ？

「それも一般的な答え。間違つてはないんだけどね。凶悪な殺人犯は、子供を殺せば葬儀で父親の会社の同僚に会えるかもしれないからって答えるらしい」

「……なるほど。じゃあ、僕は一般的な殺人犯だってことだ」

嬉しいような、嬉しくないような……。

きつとこの前読んでた「殺人犯の心理」に書いてあったんだろう。
うーん、複雑。

もやもやしている間に、僕たちは小道を抜けた。学校を囲っているフェンスに人が一人通れるような穴が開いているのだ。

もうつまづくことがなくて、和麻も嬉しいそうに見える。

「和麻さまぁー！」

すると突然、聞き覚えのある声が僕の耳に入った。よく通るソプラノ。

そして、見覚えのあるリムジンが僕たちの目の前に。

「なんか聞こえたんだけどさ、僕の聞き間違いかな？」

「聞き間違いに決まってるじゃないか！ やだなあ、岬くん」

「ねえ、和麻。黒い車が止まってるよ。おっきいね」

「あれはリムジンって言うんだよ。そんなことも知らないのかい？」

現実逃避から数秒後。

和麻はさらに汗びっしょりで、心なしか手足が震えているように見える。

そして、リムジンからは恐れていたあの二人が現れた。

「和麻さま……どこへ行かれるのですか？」

この重みがある低い声に黒いスーツ……蓮さんだ。

蓮さんの無言の圧力はハンパない。蛇に睨まれたカエル状態の和麻は僕に助けを求めてくるが、無視。

蘭さんは赤いスーツに身を包み、ニコニコしてるけどヤバイ雰囲気を感じる。餌を目前にしたハイエナと例えようか……。

「えーっと……岬くんがコンビニにエロ本買いに行こうって言うから、ついていく。恥ずかしいから蓮さんたちは、ついてこないでね！」

「ちょ……おまえ何言って」

全部言い切る前に僕の口を塞ぐ和麻。

僕は拳を固く握る。

めちやくちや和麻を殴りたい衝動に駆られるけど、和麻を殴ったら、蓮さんたちに始末される……我慢、我慢。

それに僕はエロ本なんか欲しくない。写真集で十分だ！

「エロ本だったら私がコンビニに行って買ってきてあげますから、帰りますよ！それに、今日は一利さまの誕生パーティーに次期総帥として、ご出席されるんですよ？」

「エロ本は別に欲しくないけど、僕はパーティーに出席する気もない」

一利って人は、和麻のおじいちゃん　つまり神原グループの會長だ、と和麻が教えてくれた。

でも蘭さんに神原家のことを言われた和麻は、明らかに不機嫌だ。

「何言ってるんですか！ 和麻さまは御曹司だという自覚をもっと持つべきです！」

まるでライオンのように吠える蘭さん、すっごい怖い。

僕は関係ないぶん客観的な見られるけど、怒られている和麻はとっても怖いんだろうな。

「僕は神原家とは関係ない！ 僕は自分がやりたいと思ったことをする権利がある！」

しかし、和麻もなかなか食い下らない。

眉間に縦線が増えていて、目は怒りで燃えているように見える。それにめちやくちゃ怒ってるよ……今までこんな和麻みたことないもん。

「どうして和麻さまは」

「蘭、いい加減にしろ！ 誰にそんな口を聞いていると思ってるんだ！」

二人の間に割って入る蓮さんは勇者 いや、神様だと思う。心の中で蓮さんに手を合わせる。

端からみたら、もう喧嘩だ。

会話に入っていない僕は幸福に見えるのか、それとも哀れに見えるのかは知らないけど……。

「今日は私から一利さまに伝えておきますので、岬さまと遊びに行つてらっしゃいませ」

静かに言う蓮さんは、クールでしたたかで無表情で、これぞ漢おとこと感じ。

それに僕のこと「岬さま」って言ったよ!?

ちよっと優越感。

でも、これからする調査を遊びと勘違いされた和麻はムツとした。

「私たちの仕事は和麻さまの護衛。和麻さまを邪魔してはいけない。そうだろ、蘭?」

「そうね……ごめんなさい」

蘭さんが一瞬寂しそうな表情になったのを和麻は見えていただろうか。

僕は関係ないけど、多分蘭さんは和麻を立派な総帥にしたいんだろ? ……和麻のお父さんが警視總監になってしまったから。

まあ、警視總監になろうとしてなれるワケじゃないと思うけど。

蓮さんは「何かあったら連絡してください」だけを言い残し、リムジンで帰っていった。

「和麻、大丈夫?」

残った僕と和麻。なんとなく気まずい雰囲気漂う。

これから事情聴取に行くつてのに。

「僕だつて……、次期総帥になりたくないわけじゃないんだ」

下を向いたまま、和麻はポツリポツリと話し始めた。

「蘭さんが僕に自覚を持てつて言うのもわかる。僕は神原グループに反抗してばかりだからね」

和麻の話はそこで切れて、深い深いため息をついた。
和麻が少なくとも蘭さんのことを理解しているようで良かった。
でも一つ忘れてないか？

どうして、僕たちの居場所がバレたんだ？

深刻な雰囲気の中、非常に聞きにくかったけど、僕は和麻に聞いた。

「ああ……GPSだよ。ケータイの電源切るの忘れてたんだ」

「おまえのせいかな！」

小道を通ってくる意味はあったんだろうか……。まあ、和麻の擦り傷の数が減ってただけだろうけど。

「気を取り直して行こうか、岬くん！」

「はいはい……」

僕の半歩先には和麻が地図を持って歩いている。

依頼者の家付近まで来たのはいいんだけど　なんせ住宅街。なかなか見つからないのが現状。

日はもう落ちていて、外灯が次々と付き始めている。
辺りはもう暗い。

「あのさ、それこそGPSを使ったらいいと思っただけど」

無言でケータイを取り出す和麻。

こいつに任せてたら、きつと1日じゃ足りないんじゃないか？
頭いいくせにどこかぬけている。和麻に黄色い声援を送ってた女の子たちに言つてあげたい。「和麻はアホで、間抜けでロクでなしですよー」って。

「あ、ここだ！」

和麻が指差したのは、目の前の家。僕たちずっと家の前で立ち往生してたわけか……。

それにしても大きな家。（小さい子が「おしろ！」と指さして言いそうって例えればわかるかな？）

玄関には「華山」という標札。

和麻が華山さん家のインターフォンを押した。

僕の気分は天下分け目の大戦争。けど、和麻は楽しそうだ。

「どちらさまですか？」

女性の声。なんというか、固い感じを思わせるしつかりした声だ。母親だろうか。

「お子さんの件について依頼を受けた者ですけど……」

「ああ、お待ちください」

華山さんはそれ以上なにも言わず、玄関のドアを開けた。

見た目を一言で言うところ、厳しそうな母親。赤縁眼鏡と眼鏡の奥にある釣り上がった目がそう思わせるのか。（和麻のようだ……）
髪は長い黒髪で、くるくるしている。

「こんにちは。神原和麻と申します。娘さんの搜索をお手伝いしに

来ました」

和麻は（珍しく）礼儀正しく言うが、僕たちを見た華山さんは動揺を隠せないようだ。

僕らが子供だからかな？

「KK探偵事務所というサイトに書き込みしたのはあなたですよね？ 住所もちゃんと書いてあったし、お伺いするというのもお伝えしたはずですが」

何も言えない華山さんに和麻が言う。

「と、とりあえず中へどうぞ」

リビングへ入ると僕の想像通りだった。微かに漂うバラの香り。天井には目立ちすぎない小さなシャンデリアが。

「あなたたちは、高校生かしら？」

少し驚いたような表情を見せた華山さんは僕たちに座るよう促す。キッチンから運ばれた3人分の紅茶は、僕たちの目の前に置かれた。華山さん家にあるものは、カップからしてなにもかも高級品に見える。

和麻は「ええ、高校生です」と静かに答え、紅茶に口をつけた。

「お若いのね……。でも派手に動かなければ、もう誰でも構わないのよ。とにかく、娘を日曜日までに見つけてください！ コンクールに間に合わないわ！」

話してる様子から焦っていることがわかる。

今日は火曜日だから、日曜日まであと4日。4日以内に連れて帰って来なければいけないのはキツイと思う。（テストまであと4日って焦るでしょ？）

華山さんの娘――華山亜稀ちゃんは来週の日曜日にバイオリンコンクールに出場する。

しかもそのコンクールに入賞することが有名私立中学入学の条件らしいのだ。

「亜稀が失踪したのは先週の日曜日。私と主人は朝から出勤でした。亜稀は午前中は塾で、午後からバイオリンのレッスン。亜稀が消えたのはバイオリンのレッスンに行ったあとからなんです。私が帰宅するのはバイオリンのレッスンが終わる少し前だから、娘はレッスン後は帰宅していません」

「娘さんはお昼ご飯は家でとられたんですか？」

和麻は質問するけど、相変わらず無表情。

なんとなく疲れている様子の華山さんは、軽く頷いて「ええ」としか言わなかった。

そして懷から一枚の紙切れを出して僕たちに見せる。

それは和麻が推測した通り、亜稀ちゃんからのメッセージだった。

お父さん、お母さんへ。しばらく家を留守にします。帰ってくるから、探さないで。

「これがテーブルの上に置いてありました。お願いします。どうか娘を探してください。娘にはバイオリンしかないんです」

しばらくの沈黙のあと、重い口を開いたのは和麻だった。

「言っておきますけど、娘さんはバイオリンが嫌で出て行っただけじゃないですよ」

「どうして？」

僕が聞くと、「おまえは質問するな」みたいな目で睨まれる。
あー、怖い怖い。

「バイオリンが嫌ならバイオリンのレッスンにも行くはずないだろう。それに失踪する時にバイオリンも一緒に持って行っただよ？ きっと嫌いだったらバイオリンなんか見たくもないだろうね。少なくとも亜稀ちゃんはコンクールに出るのを嫌がってないと思う。僕もそんな時期あったし」

なるほど。僕は音楽でリコーダー吹かなきゃいけないとき死ぬほど嫌だったけどな。

ってことは亜稀ちゃんが行方不明（家出に近いよね……）になったのは2日前。小学生一人だったら2日ももたないと思うんだけど、それに学校は。

「だいたいわかりました。僕たちは僕たちで亜稀ちゃんを探します。夜分失礼しました」

「ちょっと、和麻！」

和麻は一礼して、一言そう言つと、ソファから立ち上がり、すたすたと玄関に行ってしまった。

残る華山さんと僕。

僕はここに来てから一言しか発してない。来る意味はあったのだから。

「和麻くんだっけ……神原グループの御曹司なんですよ？ 朝、神原グループの人が一人きて、神原グループの御曹司が今夜くるから、これを飲ませてほしいって言われたの。風邪薬って言われたのよ。だから和麻くんの紅茶に入れておいたわ。彼、風邪ひいてるのかしらね」

華山さんはポケットから白い粉を出す。

和麻が風邪薬？ 風邪ひいているのかな。聞いたことがない。でも御曹司が来るって言われて、実際は二人で来たわけだ。

それなのに僕の方に粉を入れなかったってことは庶民丸出しだったからなのかな……。

「あの、今朝来た男の人って、スーツ来てて、肩幅広くて、無表情な人ですか？」

僕の質問に対して、華山さんは「そうそう！」と答えた。

じゃあきつと蓮さんだ。心配しなくていいか。

でも和麻が風邪薬飲んでるなんて聞いたことないんだけどね。

まあ、あいつを心配するだけ損だ。早く帰ろう……。

「早く行かないと和麻が怒るんで、僕も帰ります」

華山さんは「娘のことどうかよろしくお願いします」と深々と一礼をして、紅茶のカップを片付けにキッチンへ消えた。

時刻は7:00pm。

初夏と言えども、まだ少し涼すぎて身震いをする。

僕と和麻は華山さん宅から出てきて、家の前にいた。辺りはもう暗くて、街灯と月明かりだけを頼りに目を懲らす。

「僕が小学校に行こうって言った理由わかった？」

和麻はそう言いながら、目の前の電柱に寄り掛かる。

「事件に関係があるから、調査しに行くんでしょ？」

「違う。関係があるからじゃない。彼女が学校にいるかもしれないからだ」

亜稀ちゃんが学校にいる？ そんなわけない。

華山さんは、亜稀ちゃんが行方不明になった日から学校には顔を出していないって言ってた。ちなみに心あたりのある親戚の家にもだ。

「まず亜稀ちゃんが大人に頼らずに家出をするのは無理。親戚も頼ってないとなると、学校か塾になる。でも、彼女は今バイオリンを練習したいはず。塾だったら無理だから、学校にいると思ったんだ」

「なるほど！ 先生たちが協力してるってこと？ でもそうだったらマズイよね」

「僕にもまだよくわからない。でも、明日の夜小学校に行くから必要なもの用意として」

いよいよ僕は普通の高校生から不法侵入者に。
ワクワク？ ドキドキ？ 僕の中で言葉に表せない気持ちが目ま

ぐるしく回っている。

「そういえば亜稀ちゃんはこの小学校なの？ 私立の有名小学校？」

「ううん。染谷小学校。岬くんの家から近いよね」

すごい意外。あの金持ちの家だから、てっきり私立かと思った。でも私立って、ところどころに赤外線センサーとかがありそうで恐ろしい。

そして染谷小学校は僕が6年間通った小学校だ。少し古い木造校舎、上るとギシギシ鳴る階段、当かわからない学校の七不思議、本当に懐かしい。

「そういえば七不思議で、夜に音楽室のピアノが鳴るってあったなあ。確か、ベートーベンの『日光』だったかな」

「『日光』じゃない、『月光』。怪奇現象だしたら、なかなかセンスのある幽霊だね。一度ベートーベンについてゆっくり語りあってみたいよ」

きつと和麻に話し掛けられたら、聞きたくもない話を延々とされて幽霊も逃げるだろうよ。

そんな考えが伝わったのか、「失礼なこと考えてるだろ」と和麻が僕の足をおもいつき踏み付けた。

「痛っ！ この冷血漢め！ もう、今日は塾があるから僕は帰るからね！」

「別に一緒にいてくれて言った覚えはないんだけど……」

「ふん！　また明日な！」

小さな街灯の下、和麻一人を残し、暗闇の中を走り去る。

しかし、僕は暗闇の中に和麻を狙うハイエナが潜んでいることに気付いていなかった。

家宅搜索 vol.2 (後書き)

ありがとうございます^^

W E D : F i n g e r s (前書き)

いつも屋上で本を読んでいるはずの和麻がいない。
という事から始まる水曜日。

ちゃんと夜、小学校に不法侵入できるのか、私にもわかりません。
・(ってか、考えていません)

W E D : F i n g e r s

「岬、おはよ！ なあなあ、昨日のポップステーションみたか！？ Strawberryの3人可愛かったよな！」

「ああ。可愛かったよ……」

またこの話か……。

この墮落の感情から始まるいつもの一日。
ポップステーションというのは、今話題の歌手やアイドルが紹介される音楽番組。

Strawberryは、僕のクラスで好評の平均年齢15歳の女性アイドルグループ。リーダーのアイコ、歌が上手いリイコ、1番愛らしいユウコの3人組だ。

でも正直、僕はこういう話題に興味がない。だけどみんなとの話を合わせるために、勉強の時間を惜しんで、アイドルの名前を覚えている。

本当に苦痛。誰かクラシック好きな人いないかな……。

「ユウコって2組の杏奈ちゃんに似てねえか？ 杏奈ちゃんマジ可愛んだけど！ なあ、岬！」

この興奮気味なのは宗一。僕に話を振らないでほしい。
でも興味ないとも言えないし……ノリ悪い奴ってレッテルが貼られたら、和麻路線を突っ走ってしまふ。

「それより、和麻は？」

名前を出して思い出したけど、僕の前の席でいつも本を読んでいる

和麻の姿が今日はない。

クラス内の雑音を全てシャットアウトし、読書に集中する和麻に話かけても無駄なのはいつものこと。

「和麻？ 屋上じゃねーの？ 最近よく和麻のこと気にすんだな。それより、Strawberryが」

「あー、和麻探してくるっ！」

和麻を理由に、僕は教室から飛び出した。

本当にやめてくれって感じ。もう懲り懲りなんだ。

好きでもない話をしない点では和麻と一緒にいる方が楽なのかもしれない。和麻は無口だから、自分から話すことはなくて、僕の話に答えを返すだけ。

「かーずまー」

屋上に出ると、僕の目に曇天が映る。雨が降りそうだ。

そして、屋上に僕の声だけが響く。もし和麻がいたら、「静にしてくれたまえ」って言うのに。

「あれ、いないのか？」

時計を確認する。1時限目の体育まであと15分しかないのに、和麻は間に合うんだろうか。

とぼとぼ歩いていると、玄関付近で靴を脱いでいるいつもの姿があった。

「和麻！ 遅かったな！」

黒い髪の間から見える鋭い目が僕を見る。和麻はゆっくり顔をあげた。

あれ？ 何かいつもと違う違和感がある。

「おはよ……」

何か言いたげな顔。

しかし目を合わせず、素っ気なく言うと、和麻はスタスタとどこかへ行ってしまった。

「……和麻？」

どうしたんだろ。和麻がどこかおかしい。

僕なにかした？ してないしてない。昨日は逆にこっちが怒

りたかつたく

らいだし。

機嫌が悪いのか？ うーん、そういうワケじゃなさそうなん

だよな。

「なんだよ、和麻のヤツ……心配してやったのに あっ！」

見た目の違和感の原因は、きっと和麻の眼鏡。見たときはわからなかったけど、黒縁から紫縁に変わっている。

今日の態度がおかしいことと関係があるのだろうか。

「おっと、ヤバイヤバイ！ 時間が！」

気になったけど、とりあえず体育館に向かおう。

しかし、どこかで自分の名前が呼ばれていることに気付いた。低く、聞き覚えのある、和麻の。

「岬さま、こつちです」

振り向くと、玄関で蓮さんと蘭さんが手招きをしていた。

「蓮さん、蘭さん！ どうしてここに？ 話したいところなんだけど、あいにくこれから授業が」

「授業はなんとかなるわよ！ ちょっと話を聞いて欲しいの」

大好きな体育なのに、という気持ちは心の隅に置いておこう……。逆らうと蘭さん怖いし。

蘭さんは不安げな表情を隠せないでいる。きっと和麻のこと。僕も気になる。

「簡単に話すわ。昨日の7時頃、和麻さまから電話があつて、染谷町の住宅街に迎えに行ったのよ。でも私たちが向かっているのに、和麻さまのGPSがその場から動いていたの！」

迎えに来てって言ったのに、その場から動いたってことね。でもどうして？

「和麻さまのGPSは染谷公園で止まったから、急いで向かったら、公園の木にもたれ掛かって和麻さまが気絶していたのよ。眼鏡はつけてなかったし……。それに、微かにクロロホルムの臭いがした……」

「……和麻やつぱりなんかあつたんだ」

クロロホルムを使うなんて、明らかに誰かが和麻を襲ったってことだ。

僕があの時和麻に腹を立てていなかったら。
激しい後悔が僕を襲う。

「でも和麻さまは目が覚めても何も話してくださらなかったのよ！」

蘭さんの瞳からは大粒の雫が落ちる。嗚咽を漏らして、ハンカチで顔を覆った。

きつと、僕は酷い顔をしている。

なにも言えない自分が情けなくて、悔しくて。僕の中にあるのは後悔と苛立ちと不安だけ。

どうして僕はあの場に残っていなかった！

どうして和麻を襲うんだ！

和麻は殺される可能性だってあったのに、僕は。

「和麻さまの眼鏡が染谷町の住宅街に落ちていました。これで和麻さまに詳細を聞いてきて欲しいのです。聞けるのはきつと、岬さましかおられません」

蓮さんの右手には和麻のいつもの眼鏡があつた。

僕は眼鏡を手をとり、無言で頷いた。

時刻は12:15分。お昼ご飯の時間だ。

結局和麻とは体育の時間、ペアなのに何も話さなかった。あんなに虚しかったバトミントンは生まれて初めての経験。

しょっちゅう空振る和麻は考え事をしているからなのか、ただ単に下手なのか。おそらく後者だと思われる。

「はあ……。なんだかなあ」

弁当を持って屋上の入口に来たのはいいものの、なかなか行きづらい。ああ、憂鬱。

無視されるってわかっているのに話しかけることほど悲しいことであるのかな？

入口から見える空は僕の心境を表しているかのような曇天。いつ雨が降ってもおかしくない天気だ。
すると。

「……岬くん、いるんでしょ？ こっち来なよ」

遠慮がちで、呟くような声が入口の向こうから聞こえた。

「わかってたなら早く言えよ……入りづらかったじゃんか」

いつもの和麻。悲しそうな顔をしてて、きっと和麻は僕がここに来た理由を知っている。そんな気がした。

「君に話すつもりはなかった。でも、僕じゃなく君に関係があることだから言わないといけないんだ」

和麻の深い溜息から和麻が悩んでいることが十分にわかる。

「ただ、悩ませてる原因が僕って……？」

「次期総帥を辞退しろと言われた。辞退しないと、岬くんに危害を加えるって……」

「うん……なんかベタだね」

ベタすぎてどういう反応をしているのやら……。

そうやって脅しといて、結局失敗に終わるのがいつものオチ。気にすることないと思いたいんだけど……。

和麻によると、僕が和麻と離れてから、突然眼鏡を叩き落とされたりしい。それで車に無理矢理乗せられて、クロコホルムで眠らされてから公園に置き去りになったみたい。

「車の中には5人いた。だからコイツらを一時的に『^{指た}Finger s』と呼ぶことにする」

「おい、待て待て！　なんだそのネーミングセンスの無さは！　5人なら『^嵐Storms』とかでいいじゃん！」

和麻の眉間の縦シワが増える。相変わらずプライドが高い奴だ。でも絶対『指たち』なんて悪い奴でも呼ばれたくないと思うよ！？

曇っていた空は晴れ、太陽が雲の隙間から顔を除かせる。

お弁当を食べ終わった僕たちは腹がいっぱいになったせいかわつしかつた。

和麻もさほど気にしなくなったようで、朝のどよんとした雰囲気はなくなり、柔らかくなった気がする。

「和麻が危ないのはいつものことなんだろう？　じゃあ仕方ないじゃん。それに相手だって、ターゲットが二人になって焦ってるかもよ」

「だけど、僕は君を巻き込みたくないんだよ。危険な目にあわせたくないんだ」

「何を今更。リムジンに乗ってから、お前とのゲームに最後まで付き合っつて決めたんだよ！　邪魔されてたまるかつ！」

そうだ。僕が和麻を守るって決めたんだ。今度こそ和麻を邪魔者から守って見せる！

「うーん……心配だけど。今日の夜、9時に染谷小学校に集合ね。わかった？」

「おうよ！ いざ決戦のとき！」

ホントに今夜小学校へ行くんだなあ。気掛かりなのは、謎の5人組だけ。このまま和麻を痛めつける気はないんだろうけど、諦めるとは思えない。

嫌な予感が当たらなければいいんだけど……。

「なあ、岬い！！ 今から『びぎなーず』のライブ見に行くんだけど、お前も一緒に行かぬー？」

一旦帰宅しようと玄関で靴を履いていたところに宗一が僕のところに来た。

だーから、僕はロックだのバンドだのは嫌いなんだって何回言ったらわかるんだろうね。しかもさ、『びぎなーず』って『初心者たち』って意味だよ！？ 和麻並にネーミングセンス悪いのわからないー！？

「悪いな。今日は和麻と用事があるから遠慮しとくよ」

「また和麻かー！？ もうそんなに好きなら付き合えよー。じゃあなっー！！」

「あのねえ……」

心の中で「ライブに行くより和麻の雑学聞いていた方がマシだよ」と宗一に言うけど、伝わるはずもなく。きつと恐れていた付き合い悪い奴っていうレッテル

を既に貼られてるんだろっな。でもライブは本当にご勘弁。心臓がはち切れる感じが……こうギュッギュツツと。

「どっから侵入する気なのかなあ」

靴ひもを結びながら、高い校舎を見上げる。

とりあえず侵入口はスパイダーマンでない限り一階しか有り得ない。職員玄関から来賓装って入る。

「あつ！！ 僕OBじゃん！！」

普通に、「この校舎だよ！！ 懐かしいなあ。そうそうこの銅像あつたよなあ」「みたいなことを言っていれば来賓玄関から入っても怪しまれないんじゃないか？ 我ながら素晴らしい発想。それでいこう！

それにしても和麻が不法侵入するのに僕を選んだのは、僕がOBだからだけなのだろうか。もしそれだけだったらなんか。

「悲しいなあ……」

ポツリ、と呟く。

和麻のことを鬱陶しく思う自分がいたり、心配したりする自分がいてよくわからない。だけど、きっと大事な友達だったことは一生変わらないだろう。

それならいいじゃんか。だけど、なんとなくモヤモヤが心の中に

残る帰り道だった。

W E D : F i n g e r s (後書き)

読んでくれてありがとうございます^^
もう、お話も中盤を過ぎました。
あとは気力で書き上げます！

A r e w e a w a y ? (前書き)

さあ、
行こうか？
って意味です^w^

A r e w e a w a y ?

「遅い。2分46秒遅刻」

「小学校集合つてだけで、詳しい場所言わなかったのはお前だろーが」

僕らには小さすぎるブランコに揺られていた和麻を見つけたのは、9時ちょうど。水戸黄門のテーマを3回も歌ってしまった。ちなみに手洗いをする時は水戸黄門のテーマを3回歌うくらい洗うのがいいらしい。

話がそれた。

それで音痴なコナンのテーマが聞こえると思ったらコイツだった。

「小学校つていたらブランコしかないじゃないか」

コイツの親父さんは年少期に何を教えて来たのだろうか。忙しい警視總監でも、せめて息子を友達を気遣うくらいのことは仕付けておいてほしかった。僕がどんな気持ちで校門で待っていたのかわからうとしてくれてもいいんじゃないかと思う。街頭に群がる蛾をこんなにほほえましい目で見たのは初めてだ。

「ところでどこから入るつもりなの？」

パーな和麻のことだから、無計画なおかつ、いきあたりばったりかと思っただけ、「着いてこい」とでも言うような、どや顔。薄暗い校庭をさっさと歩いて行ってしまった。

慌てて懐中電灯を取り出そうとリュックを開く。中には雨具と筆記用具とカッターと英世先生のワンピース。

「あちゃー……ウォークマン持ってくればよかった」

少しでもこの恐怖が拭えるなら。水戸黄門のオープニングでも聞
きながら、鼻歌でも歌ったらオバケも驚かす気をなくしてくれるか
もしれないしね。

「じーんせーい楽ありや苦もあるさあー。涙の後には虹が出るう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7098p/>

僕に悪魔が舞い降りた

2011年10月9日19時06分発行